

論文要旨

〈化外〉の〈おなご〉のフェミニズム—岩手・麗ら舎読書会の思想と活動の軌跡を読む—

石井（柳原） 恵

本論文は、戦後岩手において展開したフェミニズムの思想と活動の特徴を明らかにするとともに、それらを日本のフェミニズム思想史、運動史のなかに定位することを目的とする。これまで日本のフェミニズムは東京を中心とする都市部の運動と見なされ、「封建的」で旧弊が支配する「後進地」とされてきた東北におけるフェミニズムの動きはほとんど明らかになっていない。日本のフェミニズムの全体像を明らかにするためにも、東北で展開したフェミニズムの動きに迫る必要がある。本論文では岩手を拠点として活動してきた小原麗子（1935-）と石川純子（1942-2008）、そして小原が主宰する麗ら舎読書会（北上市）の女性会員たちを取り上げ、ライフストーリーインタビュー、詩やエッセイなどの分析、および麗ら舎読書会での参与観察を用いて、多角的に岩手におけるフェミニズムのありようを明らかにすることを目指す。

序章では、「東北」という地域の歴史的な位置付けと日本におけるフェミニズムの潮流を振り返った上で、〈化外〉という概念について検討した。東北は、「中央の政治、文化圏からふるい落とされた地帯、収奪の対象」（岩手県詩人クラブ編 2005『岩手の詩』）である「化外」として他者化されてきたが、1960年代から70年代にかけて、岩手においてはこの「化外」というネガティブな他称を意味転換し、「中央」への対抗言説の立脚点とすることを目指す文化運動が存在した。このような当地の歴史的・文化的背景を視野に入れながら、本論文では、岩手のフェミニズムを、「外」にあるからこそ既存の権力構造に取り込まれない可能性を持つ〈化外〉という位置から日本の近代を問い直す〈おなご〉たちの思想と活動として捉え、その内実を考察した。

第1章では、小原麗子が1950年代から60年代にかけて参画した青年団活動および生活記録運動について検討した。小原ら「女子青年」たちは、青年団活動の中で農村のジェンダー規範への疑問や違和を話しあい、生活記録を書き、自らの女としての新しい生き方を模索した。これらの運動を通じて、「女子青年」たちは個人的な問題を「農村女性である私たち」の問題として共有し、ジェンダー構造を意識する視点を形成していった。青年団運動と生活記録運動が岩手におけるフェミニズムに果たした役割は大きく、文集作成、学習会といった運動のスタイルが麗ら舎読書会に至るまで、主要な方法論となっている。

第2章では、小原とともに麗ら舎読書会を支える中軸となってきた石川純子の「孕みの思想」について考察した。妊娠・出産という女性特有の身体経験の内実を語る言葉を模索し、男性とは異なる女性的主体像を立ち上げようとする「孕みの思想」は、「孕む」身体とその経験を思想の基点として、近代が持つ女性性を疎外する構造を看破し、母性幻想と「男並み」を目指す男女平等論へ異議を申し立てる近代批判の思想であった。「孕みの思想」は、近代において「辺境」として位置づけられ、疎外されつづけた「化外」に生きる「農婦」が保持する方言の中に、女の身体性を言語化する

可能性を見出す「聞き書き」という実践へも展開していった。

第3章では、麗ら舎という場が果たしている役割を女性のエンパワメントの観点から論じた。麗ら舎において女性達は話し合い、学び合い、その成果を文集に書くことを通じて、農村部に強固な「家」意識に基づくジェンダー規範を強く内面化していることに気付き、自信や自尊心といったエンパワメントの「核」を育てていく。そして問題意識を共有する仲間達との連帯による勇気づけにより、変革に向けて実践し、家庭内の、さらには地域の中のジェンダーを含めた社会関係を変化させてきた。

第4章では、麗ら舎読書会の女性たちが戦争、国家、ジェンダーという問題系をどのように捉えてきたのかを、読書会の主たる活動のひとつである戦没農民兵士・高橋千三とその母セキを弔う千三忌を事例として検討した。小原と石川は、平時と戦時の連続性に目を向け、「普段」から存在する差別的構造を捉え、〈おなご〉が「自己表現」することが「自由」に繋がるとの考えのもと、反戦・平和へのためめ言挙げを続けてきた。千三忌は、「平和を愛する母」として主体化する母性主義的な運動の文脈に位置づくものではなく、当地の平和運動を批判的に継承しながら、戦時と戦後を生きた〈おなご〉たちの経験をフェミニズムの視点から再解釈し、戦争を支えた近代のジェンダー構造を越えようとする営為である。また、千三忌をめぐる一連の行為を通じて、参加者たちは戦争の記憶に向き合い、それぞれの「戦争経験」を再構成している。

第5章では、第4章までの議論を踏まえ、〈化外〉性に根ざした岩手のフェミニズムの思想と活動の特徴を総括し、それを〈化外〉のフェミニズムと名付けた。〈化外〉のフェミニズムは、社会的・文化的・意識的変革を重視し、私領域における性差別の問題を提起するという、第2波フェミニズムと同様の特徴を有している。しかし、〈化外〉のフェミニズムの思想と活動は、東京など都市部を中心に隆盛したとされるウーマンリブのような第2波フェミニズムが単に“輸入”されたものではなく、戦後岩手で展開した社会文化運動を土壌として内発し、地域の課題に真向かいながら展開してきたものである。

〈化外〉のフェミニズムにおいては、「女」や「女性」ではなく、「おなご」という方言が自称として用いられる。「おなご」ということばの選択は、ジェンダーと〈化外〉という場所性に立脚した主体〈おなご〉を現出させ、地方の、農村の中から変革を目指すという立ち位置も表明する。〈化外〉のフェミニズムは、近代化の矛盾に直面した岩手の現実に根差し、〈おなご〉たちが経験した都市部の女性とは異なる近代を問い直していく思想的営為である。

同時に、〈おなご〉たちによる〈化外〉のフェミニズムの誕生と展開過程は、決して地域の中に閉じたものではなく、フェミニズム的意識を共有する国内外の女性同士の緩やかなネットワークの中で形成されてきたものでもあった。また、麗ら舎の〈おなご〉たちは、〈中央〉と呼ばれる領域の文化や知の仲介役としての役割も果たしており、そこに〈中央〉と〈化外〉とを対立させる構造を異化する可能性をも見ることができる。